

昭和萬葉集

卷三

昭和九年～十一年

講談社

昭和萬葉集 卷三

定価 一、六〇〇円

昭和五十四年五月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所

凸版印刷株式会社

製本所

和田製本工業株式会社

用紙

本州製紙株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九七九年 Printed in Japan



0392-441036-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷三／目次

口絵
凡例

I

戦争の足音

憂鬱な時代

12

しのびよる影

15 14

戦争のうわさ

軍国への道

16

非常時日本

18

燈火管制

19

禁じられた思想

国禁の書

20

転向

22

天皇機関説

22

II

東北大凶作

稔らぬ稲

36

ひもじい子ら

39

複雑な国際情勢

緊迫の日中関係

28

伊エ紛争

29

ファシズムの波

31

スペイン動乱

32

海軍軍縮会議

34

ドイツ戦没学生

34

凶作地を見る
凶作を思う

41

40

二・二六事件

雪の日	44
戒厳令下る	
武力鎮圧へ	49
兵に告ぐ	52

III

疲れきった農村

農民の苦悩	66
嘆きと怒り	67
小作と地主	68
負債と減収	70
不調の糸価	73
北海道開拓	75
ブラジル移民	75

失業と貧困

借金	76
失業・就職難	78
貧しいくらし	84
女工哀れ	87
労働争議	89

事終わりて	53
辞世	58
処刑	61

華麗な都市文明

軍需産業の伸張	91
工場風景	92
発展と変貌	95
丹那トンネル	95
小河内村問題	96
公害	96
新議事堂建つ	97
選挙・疑獄	98
喫茶店・繁華街	99
映画・ラジオ	100
オリンピック	102
スポーツ	103

生活の周辺

都会の日常	104
-------	-----

IV

日々の断想 108
 東郷元帥国葬 109
 函館大火 112
 室戸台風 113

軍隊生活

日食 115
 忠犬ハチ公 116
 心中・猟奇事件 116

満蒙の生命線

渡満部隊を送る 120
 討匪行 122
 兵士を思う 125
 満州へ 127
 大陸にて 128
 満州国 132

徴兵検査・応召

入営 133
 兵営生活 134
 演習 136
 演習をみる国民 138
 艦隊生活 140
 兵のいる風景 140
 帰還 141

V

農村の日々

稲作に励む 144
 畑で 147
 養蚕 148
 農家日常 150

仕事の歌

馬の歌 153
 炭焼 155
 鉾山にて 155
 木挽 157

VI

愛と死

妻と別れて	193
病む妻	191
妻を	189
夫を	188
父母を偲ぶ	187
母の死	186
母を	183
父の死	183
父を	181
愛の歌	176

石切	157
土工	157
紙漉	158
大工	158
漁港	159
工場にて	160
サラリーマン	161
新聞記者	162
官公吏	163

遺詠と挽歌	
直木三十五の死	207
土田杏村の死	207

妻の死	194
みどり子	195
子を	196
子の死	199
子を偲ぶ	201
姑・伯父・祖母	202
兄弟・姉妹	203
師友を	205

行商	163
商いの歌	164
教師	166
作家	169
窯業	170
医師	170
僧侶	172
弁護士	173
女給・娼妓	173

VII

四季の移ろい

海水浴	虫	夏の木草	海	畑にて	夏山	夏来る	祭	春の鳥	春の花々	春の日	春来る
242	239		237	236	235	234		232		227	226
		237						229			

島田旭彦の死	与謝野寛の死	坪内逍遙の死	竹久夢二の死	川崎杜外の死	内藤湖南の死	中村憲吉の死
214	212	212	211	211	210	207

214 212 212 211 211 210 207

病みふして

病床の日々	ハンセン氏病	結核	魯迅の死	赤彦を偲ぶ
220	217	214	214	214

冬の祭	冬の巷	冬鳥	冬の花	冬山	風霜	雪	冬	秋の虫	鳥	紅葉のころ	秋の山	秋	都会の夏
258	258	256	255	254	253	251	250	249	248	243	242		242
										245			242

歳暮・新年

259

天地自然

260

日本の山

264

山に歌う

268

海の歌

270

島と海

271

くさくさの歌

北国の旅

274

古刹名蹟

274

心の風景

心の風景

281

街道・峠

276

瀬戸内旅情

276

南のたより

276

学芸に生きる

277

神と仏

279

おとめ

280

試行の挫折〈昭和短歌史概論〉

290

歴史の大海の中で〈昭和史私論〉

——山田宗睦

296

年表

306

作者略歴・索引

309

■脚注目次

《戦争の足音》	12	ヒンデンブルク	32	二・二六事件と秩父宮	55	《華麗な都市文明》	
戦争の足音	12	ヒトラー	32	事態の收拾	58	軍需産業	92
非常時	14	レーム	32	事件と市民	60	労働者	94
国定教科書改訂	15	ムツソリーニ	32	軍法会議と処刑	62	丹那トンネル開通	95
軍用犬	15	日独防共協定	33	《疲れきった農村》		小河内ダム騒動と白秋	96
戦争の予感	16	スペイン内戦	33	疲れきった農村	66	新議事堂	97
要塞地帯	18	ロンドン軍縮会議	34	農本主義	68	肅正選挙	98
軍機	18	『ドイツ戦没学生の手紙』	34	米穀統制法	69	喫茶店	99
《禁じられた思想》		《東北大凶作》		小作争議	69	カフェー	99
転向	22	東北大凶作	36	農村更生運動	70	娯楽としての映画	100
天皇機関説問題	22	欠食児童	40	糸価の変動	74	ラジオ	101
国体明徴	23	村を出る娘たち	41	北海道開拓	75	ベルリン・オリンピック	102
治安維持法	24	《二・二六事件》		ブラジル移民	76	スポーツ	104
憲兵	25	二・二六事件	44	《失業と貧困》		《生活の周辺》	
《複雑な国際情勢》		陸軍首脳の動揺と戒厳令	46	失業と貧困	77	流行歌全盛	106
西安事件	28	戒厳令	48	就職難	79	『天沼』	108
イタリアのエチオピア侵略	30	蹶起部隊から反乱部隊へ	50	紡績工場	87	東郷元帥国葬	109
ファシズム	30	天皇の意思	52	労働運動	89	函館大火	112

室戸台風	113
忠犬ハチ公	116
阿部定事件	117
〈満蒙の生命線〉	
慰問袋	120
関東軍の兵力増強	121
中国東北の抗日運動	122
匪賊討伐	123
馬占山	123
日本租界	124
満州移民	127

中国東北の日本人	128
協和会	130
満州帝国	131
鄭孝胥	132
満州国国務院	132
〈軍隊生活〉	
第二乙種	133
隊付将校と兵士	134
軍隊手牒	136
陸軍大演習	138
農民たち	140

短期現役	142
連隊旗手	142
〈仕事の歌〉	
サラリーマン	161
『集團行進』	162
行商人	164
商人	166
教師	168
生活教育	169
女給	173
娼妓	174

〈道詠と挽歌〉	
中村憲吉の死	208
与謝野寛の死	213
〈病みふして〉	
結核対策	215
〈四季の移ろい〉	
「多磨」の創刊	230
〈心の風景〉	
宮柊二の「悲歌」	286
『時計台』	287

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に
つくられた短歌を対象として、一般投稿
歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌
等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もし
くは初出掲載誌発刊年等）によって分類
し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分
類・配列した。また分類ごとに初出作品の
上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等
を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末に
つけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は
：で示した。

【例】大8：（生年のみ判明）
：昭20（没年のみ判明）
・出典は、原則として編纂部が典拠とした
ものを示した。『』は歌集、『』は新
聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、
刊行年、刊行年月（日）号を示す。

【例】『形相』（23）（昭和二十三年刊）
『アララギ』（17・2）（雑誌『アラ
ラギ』昭和十七年二月号）
『朝日新聞』（17・12・8）（昭和十
七年十二月八日号）

・二首以上の収録作品で、出典が複数とな
っている場合の表示。

【例】『アララギ』（17・9、10）（九月号
と十月号）
『アララギ』（17・9）（三首）（18
・3）（二首）（十七年九月号から三

首、十八年三月号から三首）
・必要に応じて、出典の下に原典につけら
れた小題を付した。

【例】『露原』（22）「食生活」へ歌集『露
原』にある「食生活」という小題の
ついた一連からの抄出

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表
作の典拠等をへへ内に記した。

【例】『北支にて』（日記より）
『沖修二』阿南惟幾伝（45）より
5 作品の表記は、よみがな（ルビ）をふくめ
て、旧かな使いを原則とした。よみがなは
編纂部の判断で、必要に応じて加減した。

漢字は新字体使用を原則とした。
6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、
太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお
（ ）内は執筆者名。

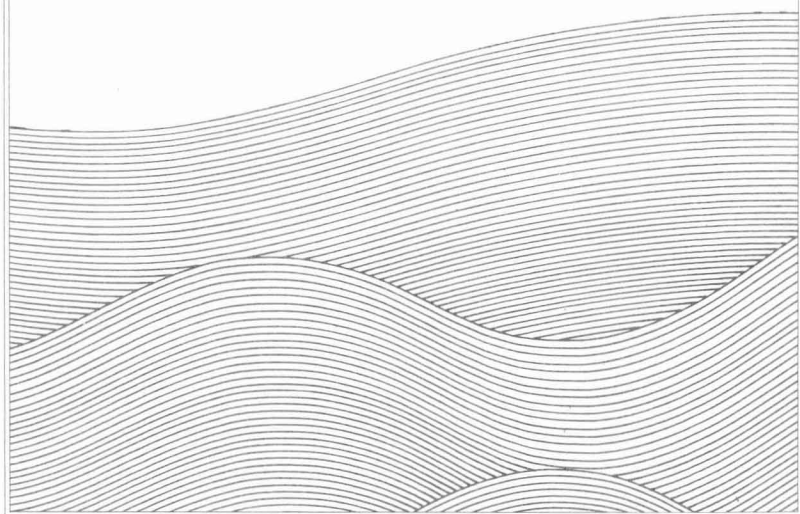
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解
を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要
に応じて『詞書』と頭につけて脚注欄に引
用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当
する脚注の頭に、*または**をくりかえ
し付して、対応させた。

■ 本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在
不明等のため、連絡のとれない方がありま
す。巻末作者略歴・索引の*印を付した作
者がこれに該当しますが、お心あたりの方
は、編纂部まで御一報くださいますようお
願いたします。

I



戦争の足音

土岐善磨 明18ゝ 『近詠』(13)

憂鬱な時代

はじめより憂鬱なる時代に生きたりしかば然かも感ぜずといふ人のわれよりも若き

かならず死滅すべしと信ずるものの生存の前にわが苦悩をさいなみつゝ *

次ぎの時代のいよいよきびしき憂鬱に対しつゝ静かに生きて人に知られざらむ

われを指さすおほきなる手を常に感ず闇のなかよりひかりの中より

土屋文明 明23ゝ 『六月風』(17)

大陸主義民族主義みな語調よかりき呆然として昨夜は聞きたり

須藤克三 明39ゝ

事変日毎大きくなりて街に住む留学生夫婦は標札はずす

三好晴光 『アララギ』(11・12)

国家社会主義を若き官吏があげつらふその得意さは思ひても見よ

神原克重 明25ゝ昭和11ゝ 大日本歌人協会編『昭和十二年版年刊歌集』(12)

戦争の足音 昭和九年から十一年にかけて、戦争への道はいよいよ本格的に押し進められていった。すでに昭和六年の満州事変、翌年の五・一五事件など、「非常時」が呼号されてきたが、日本の国際的孤立は昭和八年の国際連盟脱退以後深まり、昭和十一年の日独防共協定締結によってソ連との対立の姿勢をつよめ、英・米との協調は崩れはじめた。中国東北(満州)侵略から、さらに中国本土への侵略構想も具体化しはじめた。国内では、世界恐慌からの立直りは、軍事侵略にともなう軍需拡大に求められ、このような方策から置去りにされた農村の危機は深刻

この国の大き嘆きをいふとして心驚き声ひそめ言ふ

柴谷武之祐 明41「アララギ」(9・12)二首(10・2)

すでに險^{けは}しき世となりみつ学資にはわづらふこともなくて過ぎ来し

落葉ふみて並木の下をゆきかよふ学生たちよ今をたのしめ

みだれたる時代^{じだい}いくつか思ひみて崇峻^{すしゆんき}紀の示すことぞさびしき*

金石淳彦 明44昭和34「アララギ」(11・1)

コンクリートの床^{ゆか}冷ゆる教室に新しき世を云ひし友もいづち行きけむ

松坂二郎 明41「アララギ」(11・1)

知らぬまに学籍ぬかれし友あれど向坂逸郎^{さきさいつらう}を嚮^{むか}に迎ふ**

藤田 清 明40「アララギ」(9・5)

鳩山^{はやま}文相^{ぶんさう}のやめたることも少しばかりわれにかかはりのありと思へり

矢部道気 明22昭和35 日本歌人協会編『昭和十年度版年刊歌集』(10)

国をあげていそぐ兵備のととのへるこのあかつきを人は憂ふる

青木三二 『まるめら』(12・5)

であった。とくに昭和九年の西部日本の旱害、室戸台風、そして東北大凶作は、農民の生活を破綻状態にした。失業、低賃金の改善もおくれ、民衆の生活安定は実現しなかった。こうした状況の下で、ならん打開策のない政界・財界に對し、軍部の権力奪取の姿勢は表面化した。二・二六事件は、直接行動を標榜する皇道派を放逐して権力支配を確立しようとする、統制派の意図を実現する機会に利用された。そしてこの年広田内閣は「国策の基準」を決定し、軍備の拡張、言論・思想の統制をはじめとして、戦争体制の方向に一歩につきすすむ一歩を踏み出した。(原田勝正)

*崇峻紀 日本書紀中の崇峻天皇の事蹟を記した部分。崇峻天皇は物部氏一派を倒して即位したが、のち東漢直駒^{あきま}舒^{しゆ}勢^{せい}に殺された。

*向坂逸郎 大正・昭和のマルクス経済学者(一八九七-)。労働派の理論家。昭和三年九州帝大を追われ、山川均らと雑誌「労働」によって、講座派と対抗、昭和十一年人民戦線事件で弾圧された。敗戦後九大に復職。社会主義協会の理論的中心をなした。

そとはものすごい かぜ まづしい まつくらな ゐなかを ふきあれてゐる

黄河の水があふれて また 何万といふ民が 虫のやうに 死んだといふ

石原 純 明14ノ昭22 《河出書房『現代短歌5』(15)より

悲痛な 革命の日の 想念よ。あかい燐寸の軸が 折れてゐる。

およそ くろいものほど ひかる。いましめられる 非常時の なにとない をのき

赤木健介 明40ノ『意窓』(17)

現実の暗さ、冷たさ、堪へに堪へつつ、灰の余温に手を翳す・冬。

吹きつゝの暴風雨の中に 一燈のゆるがないのを みつめて過ぎた。

飯岡幸吉 明31ノ昭48 『アララギ』(9・7)

丘かげにとほくかくるる兵列は單純化せる機械の類か

福田栄一 明42ノ昭50 『ポトナム』(9・7)Ⅱ二首 『短歌研究』(10・10)

晩き夕餉をへてよみやる子の本に戦ひの絵の多きにおどろく

ただならぬ世様といふは我もいへやがてさびしく身をおもひみる

街のなかを戦車いく台かとほりしが濡れたる鉄のほひ流れぬ

*黄河中国の北部を流れる大河。全長約四八〇〇km。古来洪水で氾濫することが多かった。

非常時 昭和七、八年ころから、恐慌による疲弊・テロの続発などの社会問題、中国東北侵略にともなう英・米との対立激化など国内・国際問題をかかえて、支配体制は「非常時」を呼号し、国民の時局認識をうながした。これは大正デモクラシー以降の自由主義や、社会主義抑圧の意味もふくまれ、防空演習や飢饉救済運動、国防献金運動などを通じて、国家総動員体制への足ならしを進めることにもなった。(原田)

*世様世間の様子。世のありさま。

我もいへ自分も言うけれど。